

第15部会

葛城山と熊野山地とを最短距離で結ぶ道筋でもあった。さらに、高野山の真言宗の聖地でもあった。したがって火雷神社も、早くからこうしたルート形成の流れに巻き込まれていったのであろう。

もうひとつは、十世紀の僧、貞崇のことで、宮中落雷を雷神と結びつける作業をしたとされている。彼が当時、清涼殿に伺候する僧であったことは確かである。この貞崇が、宇智郡の若宮火雷神のことを知っていて、こうした言説を行ったと仮定しても、実は不思議はない。彼は、三十年以上も金峰山の辺で修行していたからで、都との間を往還しながら山林修行に励んでいた僧である。地理的に豊富な知識を有していた貞崇が、宮中落雷を雷神のしわざとする言説を広めるのに一役買っていた可能性は高い。

もともと雷神は火と水の神であるため、貞観の神泉苑御霊会が水辺の鎮祭であったように、御霊信仰との親和性は高かった。井上内親王が生きたまま龍になり祟りをなしたとする説と、貞崇の説話で火雷神が亀の形をとっていたこととは、モチーフが共通する。こう考えると、京都の御霊社が祀る「八所御霊」に「火雷神」が入っていて、奈良の御霊神社に火雷神がないという事実は、雷神を御霊信仰に結びつけた功が、(南都仏教ではなく)真言にあったことを物語っているとも思うのである。

ト占技術から

思索・信仰・実証科学への展開

平野 孝 國

人間が生きる上で最も大切なことは、衣食住を調達し、異性を得て性欲を充足することである。人間社会には膨大な知識と行動体系が蓄積されている。就中、明日の生活環境に関わる技術でありながら、実証をえぬまま、昔ながらに守っている行いがある。「うらない (Divination)」である。

ギリシャの古代世界では、日常生活から、国家的な政治、戦争、遠征にかかわる重大問題まで、占い師の判断、憑依者の託宣を指針とした。失敗は依頼者の罪、占い師の罪として処罰し、更迭された。

一般に、鳥の挙動・さえずり・飛び方・去来する方角により、吉凶と運命を判定する占鳥術が行われた。⁽¹⁾金銀を浮かべる水占い・鏡に糸を付けて泉に垂らして見る鏡占い・木の揺れ方・ざわめき・葉叢・青銅器の音からゼウスの神託を聞く占い。鉛に瑕を付けて司祭に見て貰う鉛占い等があった。星占いは最も古く、天文学となる。

ここで注意すべきは、これら占い師の列に立って、哲学史上有名なソクラテス・プラトン・アリストテレス等の名があることである。彼等は諸現象の未来を予言し、神意を占ったばかりではない。事物の考察から、根本原理を洞察出来ると考えた。

哲学の舞台はやがて欧州全土に拡大される。ドイツ、ケーニッヒスベルク大学神学部の I・カントは、プラトン等が、純粹思惟 (idea) により普遍妥当な概念的實在に至ると主張したのに対し、直感的理性 (主観的理念の能力) により、客観世界の理解・認識を可能とする (理性・判断・実践) 批判説を提唱した。キリスト教の神学世界を脱し、新たな人間觀を確立しようとする動きであった。このカント門を叩いた J・ヘルダーは、カントと彼の元にいた H・ハマンの教えに従い、民謡採集に騎行し、さらに海路北欧から南欧・イタリアへの大旅行をするに及び、言語学・歴史学の大著を著し、地理学・民族学・民俗学・宗教学への道を開く。疾風怒濤時代への突入である。⁽²⁾

これより三〇〇年も早く、スペイン女王の援助を得、パロスを出港したコロンブスは、大航海時代への幕開けをした。陸の文化科学的動向と相俟ち、ゴッド世界への科学的侵入であった。浦賀へ回航したペリーの艦隊は、新市場を中国に求め、日本を橋頭堡にするアメリカの国策であったが、大局的には、神学に発した哲学的発想といえよう。

有無を云わさぬ開港要求に屈した日本は、代償として科学文明の所産を手に入れる。ペリー来航から半世紀、日本は日清・日露の戦争に大勝し、世界を驚かせたが、和魂洋才と自惚れた国民は、科学製品に好みの手を入れ、からくり手法の改良を試みたが、所詮模倣の域を出なかった。全国の神社では、平安衣装で擬古文の祝詞を読み、社頭では神籤・御札・御守りを頒布していた。大東亜戦争は、欧米植民地主義に抗する、国民の熱烈な支持を得て開戦。地球上から植民地を一掃した。しかし戦

闘には敗れ、大都市は焦土と化した。国力の差、模倣科学の欠点。脱落した哲学の所産とは、未だに気付いていない。

注

(1) ロベール・フラスリエール (戸張智雄訳) 『ギリシアの神託』東京、白水社、一九六三年、二〇頁以下。

(2) 平野孝國「ヘルダーにおける『自然』『人間』『神』『宗教研究』」一八二号、一九六五年、五三―八五頁。同「民族学の先駆者 Johann Gottfried Herder (1744-1803)」『民族学研究』第三〇巻第二号、一九六五年、一五〇―一六〇頁。

「霊場」における死者供養の具体相

—— 秩父観音霊場を事例として ——

徳 野 崇 行

これまでの死者への弔いに対する研究では、死に伴う葬送習俗や墓、先祖觀、その担い手となる祭祀集団が主要な論点となっており、対して仏教諸宗派の僧侶が営む葬儀後の追善供養に関する歴史の変遷、法要、儀礼の現状に関する研究は少ない傾向がある。こうした状況を鑑み、日本仏教における追善供養の具体相を秩父観音霊場の一番札所である四萬部寺での「大施食会」という儀礼を通して考察するのが本稿の目的である。四萬部寺を事例とするのは、筆者が日本仏教における死者供養を①菩提寺、②霊場寺院、③本山寺院、④行者仏教という四つの位